

歌壇 俳壇



＜日曜日のブローチ 04＞ junaida

俳句時評 語りたい俳人

岸本 尚毅

董振華編「語りたい俳人 師を語る友を語る」上下巻、コールサック社は、一九八〇年に降に逝去した俳人二十四人を取り上げ、その弟子や句友の談話をまとめたもの。作家論として、また俳壇のオラル・ヒストリーとしても興味深い。俳句はわずかに十七首。作品の読みは読者に大きく依存する。その点、弟子や句友が句を語るときは作者と読者との近しさは、俳句を深く鑑賞する上で有利な条件である。

たとえば、飯島晴子の「月光の象音にたぬかといふは、アンリ・ルソーの絵を思わせる奇想の作。晴子を語る奥坂まよによれば、この句の契機は、その日の吟行で動物園の象の飼育係を見かけたことだった。あるいは「八頭いづこより刃を入る」とについて、奥坂が「この句は実は八岐大蛇なんですね」と言ったら、作者の晴子は「それも読めるんですね」と喜んだという。

また、飯島晴子の「月光の象音にたぬかといふは、アンリ・ルソーの絵を思わせる奇想の作。晴子を語る奥坂まよによれば、この句の契機は、その日の吟行で動物園の象の飼育係を見かけたことだった。あるいは「八頭いづこより刃を入る」とについて、奥坂が「この句は実は八岐大蛇なんですね」と言ったら、作者の晴子は「それも読めるんですね」と喜んだという。

◆5月4日の歌壇俳壇面は休載します。

第24回俳句四季大賞・第13回俳句四季新人賞・第12回俳句四季特別賞 東京四季出版主催。大賞は東京都の中村和弘さん(83)の句集「荊棘」(ふらんす堂)。新人賞は和歌山県の山海和紀さん(35)の「火は蛇」(30句)が選ばれた。特別賞は兵庫県の森田純一郎さん(71)の句集「街道」(東京四季出版)。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合もあります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。

大串 章選

☆染しませ最後の締めと花いかだ

車窓より花の盛りや途中下車 (三郷市) 村山 邦保

国境を知らぬ流水着岸す (横浜市) 鍋島 武彦

春雷に覚悟問われて立ち竦む (伊賀市) 馬岡 裕子

春愁がわれを青野へ誘へり (相模原市) のなかあけみ

短編の起承転結春の屋 (前橋市) 荻原 葉月

春の野に雲に教へを請へと父 (所沢市) 高橋裕見子

ふるさとのひと駅(どの)の桜かな (さいたま市) 齋藤 紀子

曾祖父の名を番号に竹の秋 (横須賀市) 前田あさ子

跡を継ぐ者なき家に燕来る (相模原市) 新垣 豊太

(長岡市) 柳村 光寛

【評】第1句。「最後の締め」が言い得て妙。満開の桜も美しいが水面に浮く花筏も見甲斐がある。第2句。咲き乱れる花に惹かれて思わず途中下車、満開の桜を満喫。第3句。この「流水」どこから流れて来たのだろうか。流水に国境はない。

高山れおな選

クリームと館の層なす春の雲

狂ひたるものさしのあり春の闇 (鳥田市) 魚野眞理根

繭になり散り散りになり花筏 (埼玉県松伏町) 安武喜代子

ぶつんにこに座つて朝の打合せ (朝倉市) 深町 明

この国の政治に触れず野に遊ぶ (東京都板橋区) 竹内宗一郎

春愁やシーラカンスの大きな目 (越谷市) 新井高四郎

噂やどんなうれしきことならん (松山市) 野村タカ子

第二子抱き三人の初さくら (下関市) 内田 恒生

耕の兄に父見ゆありし日よ (福岡市) 満重 勇一

右さへ左なのはななの駅 (天童市) 高橋ゆり子

(岡谷市) 日野 美江

【評】魚野さん。甘党の作者の幻想というか妄想というか。安武さん。このものさし、アメリカ大統領の頭の中にあるそれだろう。しかし、その人物のことを一旦脇に置いて読める多義性もある。そこが良い。深町さん。執拗な観察が生きた。

小林貴子選

ツリーハウスの脚は一本木の根明く

新築の施主は新婚囀れる (札幌市) 樋山ミチ子

嫌ひではない壺焼の砂袋 (堺市) 松本みゆき

春暁や治療効果といふ褒美 (香芝市) 土井 岳毅

☆染しませ最後の締めと花いかだ (新座市) 稲葉 敏子

海市には果たせぬ夢の骸あり (三郷市) 村山 邦保

バタフライエフェクトいいえ狂ふ蝶 (札幌市) 三船 悦子

清明や命の初め赤つぽき (塩尻市) 田原 章弘

瀬戸内海グラデーションの春来る (沼田市) 奥山 公子

チューリップ取り散らかして終りけり (さぬき市) 鈴木 幸江

(明石市) 榎野 実

【評】一句目、木の周囲の積雪が逸早く溶け出すことを「木の根明く」と呼ぶ。地域の言葉が春の季語に。二句目、鳥の囀りの取合せが明るい。三句目、菜蝶の身のうち、一番奥の部分も楽しもうと。四句目、傷病からの回復期に希望がとまる。

長谷川 耀選

東京の一番奥の山桜

地獄絵の打ち重なるや涅槃の日 (東京都板橋区) 竹内宗一郎

春の水なつかしからん空の色 (東京都文京区) 片岡 マサ

春愁と言ふほどでなし物忘れ (札幌市) 関根まどか

福島の方先だけの春惜しむ (柏市) 藤嶋 務

春眠の覚めて冷たくある枕 (福島県伊達市) 佐藤 茂

驚にゆるりはじむる日曜日 (筑後市) 近藤 史紀

行く春や空にもみあふ鳥の声 (下野市) 久保田 清

花冷えや子猫のようになていたい (境港市) 大谷 和三

春や春脱走の大戻らざる (成田市) かとうゆみ

(熊本県玉東町) 松本 妙子

【評】一席。奥多摩の山か、森閑と咲く桜。東京も奥深い。二席。この世の地獄が重なってみえる。仏の教えも奥が深い。三席。ちらちらと水に揺れる春空。懐かしむかのように。十句目。忠実な犬にも抑えられない思いがある。寛恕の心を。